
仲間たち

MIH^O^

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仲間たち

【Nコード】

N8841Q

【作者名】

MIH^O^

【あらすじ】

天然×鈍感×最強な

流華くるか>は男子×不良校へ

いろんな仲間たちと出会い

学園生活はとても楽しくなっていく

流華は仲間たちが抱く恋愛感情にきずくはずもなく・・・

流華はみんなのことを仲間だと思っている

この話はそんな仲間たちが繰り広げる日常の数々

#ちよつとした紹介#

妃きさき 流華るかは、

ある事情で男子×不良校へ

そこで出会ったのは8人の仲間達

茶髪×金メツシュ<輝の弟>赤坂あかさか 晃あきら
黒髪×金メツシュ<晃の兄>赤坂あかさか 輝ひかる

茶髪×青メツシュ<蒼空の弟>水島みずしま 空くう
黒髪×青メツシュ<空の兄>水島みずしま 蒼空そら

茶髪×銀メツシュ<怜の弟>黒崎くろさき 蓮れん
黒髪×銀メツシュ<蓮の兄>黒崎くろさき 怜れい

茶髪<沙織の元彼>藤田ふじた 拓海たくみ
黒髪<流華と同じ仕事>神崎かみさき 雅みやび

8人の仲間たちは流華に恋愛感情を抱いていた

楽しい日々を送る流華だったが

流華は刻一刻と死へと近づいていた？！

静蘭高校？！

妃^{きさき} 流華^{るか} 16歳 高校1年生

今はある事情で、姉の元彼の藤田^{ふじた} 拓海^{たくみ}の家に居候中

拓海は今高校3年生だけど、学校で問題を起こして停学中・・・

拓「流華」親父から話があるからリビングに来て」

「あ、わかった」

何の話だろうなあ・・・？やっぱり高校のことなんだろうなあ・・・

「あの」話ってなんですか？」

「流華には私が勤めている静蘭高校へ行ってもらおうよ」

「え・・・」

「ちなみに拓海と同じ学校だから」

「静蘭高校って言ったら男子×不良校でしかも全寮制じゃん」

「だからこれをするんだよ」

そういわれて渡されたのは、カツラと銀縁めがね

「じゃ、流華がんばってね」

「はあ・・・やるしかないか」

「今は男装中」

「さて、静蘭高校に行くか」

？ 静蘭高校へ？

さすが不良校だけあって学校には落書きだらけだ・・
きつと族に入っている人もいるんだろうけど、
私にはあまりこわくはない。だって、拓海にケンカの仕方とか
教えてもらって、まあまあできるから。

「なんだろう、あの人だから」

シュ ドス バキ

「朝っぱらからケンカかかよ」

ま、どうでもいいけど。さて、職員室にいくか。

ガラガラ

「今日、転入することになった妃 流華です」

「ああ、きみの担任は、立花 涼介たちばな りょうすけだよ」

「きみが妃 流華か」

「そうですか？」

「じゃあ、ついてきて」

「はい」

にしても担任どこから見ても不良にしかみえないし
髪は銀髪だし服装がいかにも不良っていう感じの担任

「呼んだら入ってきて」

「はい」

ガラガラ

「お前ら、転入生がきたぜ」

「よっしゃあ！パシリから解放される」

「殴ってストレス解散できる」

「妃、入ってこい」

「妃 流華です。これからよろしく」

「あいっ、イケメンじゃん」

「たしかに」

「なんか、殴りたくなってきた」

殴りたいとか本気かよ？うるさいやつらだな・・・

“ 仲間 ”

ガラガラ

「わあゝもしかして、きみ転入生？」

「そうですけど」

「僕、赤坂 あかさか 晃 あきひ っていうんだゝよろしくね？」

「よろしく」

「赤坂、水島 みずしま、黒崎 くろさき 席に着け」

「はい」

「・・・」

「まったく、1年C組は問題児ばかりで疲れる・・・」

1年C組は問題児ばかりのクラス

そして、な・ぜ・か自分も1年C組だ・・・

「・・・以上だ」

やっと、話が終わったか

にしても、なんであの3人に囲まれている席なんだよ・・・

「ねえ、一緒に屋上いこうよ？」

「別にいいけど・・・」

「じゃあ行こう 空 くう に蓮 れん、いいでしょう？」

「ああ・・・」

屋上立ち入り禁止って書かれてるし・・・

カチ

鍵どこからとってきたんだよ

「やっぱり、屋上はいいねえ」

「晃 後ろの人誰？」

「あつ、みんな紹介するから集まって」

「まずは僕からね。僕は赤坂 晃だよ」

「晃の双子の兄の赤坂 輝です」

「俺は水島 空」

「空の双子の兄の水島 蒼空です」

「俺は黒崎 蓮だ」

「蓮の双子の兄の黒崎 怜」

「俺は、妃 流華」

「流華は今日から僕たちの仲間だから、いいでしょ？」

輝、蒼「はい」

空、蓮「ああ」

怜「」

「仲間にしてくれるのか？」

晃「もちろん」

「ありがとな」

「屋上でさぼり中」

“仲間”って言われるのは、悪い気分じゃないな

* 寮生活のはじまり *

「妃 これがお前の寮の鍵だ」

「ありがとうございます」

この寮、意外とでかいなあ
49号室ってどこだよ・・

「！流華じゃん どうしたの？」

「49号室ってどこか知ってるか？」

「49号室ってことは、僕たちと同じだよ」
「そうか」

～移動中～

「ここが僕たち7人の部屋だよ」

「へえーやっぱり中也広いんだな」

「そうだよ」

蒼「流華はこの部屋ですよ」

「ん、そうか」

ガチャ パタン

にしても男装は思っていたよりもだるいなあ
今日はいろんなことがあったな

人なつつこそうな^{あきら}晃 かわいい系の^{ひかる}輝
ツンデレみたいな^{くう}空 さわやかな^{そら}蒼空
リーダー的存在の^{れん}蓮 無口な^{れい}怜

そんな6人ともつと仲良くできるかなあ？

「さて、明日もがんばるか」

く 翌朝く

翌朝

リリリリンリリガチャ

「んゝ学校行かないとな」

そついえば最近、発作がでないなゝどうしたんだろうな？

ガチャ

「蒼空おはよう」

蒼「おはよう」

「蒼空が朝食作ってるのか？」

「そうですよ。あと少しで朝食ができますよ」

「そうか」

朝食はトースター、サラダ、スープの洋風みたいだな

「できましたよ」

「いただきます」

もぐもぐ

へゝ味付けとかばっちりでおいしいな

「ごちそうさま」

「じゃあ、学校行くな」

「一緒に行かないんですか？」

「ああ じゃあな」

けんか；

ガシユ ドス グサ

また朝っぱらからケンカかよ
なんでそんなにケンカしたいんだか・

晃「流華おはよう」

「おはよ」

「っ！流華後ろ！」

「とりゃー」

うわゝスピード遅すぎるし
こういう時は蹴るか

ドス

「グハ」

蓮「お前、ケンカできるんだな」

蒼「すごい蹴りですね」

晃輝「すごい」

「相手全然強くねえし」

空 怜「ああ・・・」

「転入生意外と強えーじゃん」

「そうだな」

「あゝすげえあの顔殴りたくなってきた」

また殴りたいとか言ってるやついるし・
あゝあ全然体動かせなかった・・・

晃「流華行こう」
「ああ」

“テスト”

「流華く久しぶり」

「拓海もう学校来てもいいのか？」

蓮「流華、誰？」

「姉の元彼の藤田^{ふじた} 拓海^{たくみ}」

晃「なんでわかれたの？」

拓「俺と沙織^{さおり}には相手以上に好きな奴ができたから」

蒼「へえくそうだったんですか」

拓海と沙織が別れたのはそれが理由だと2人は言っていた
拓海と沙織は付き合って1か月で別れた

1か月とか本当にたがい同士好きだったのかよ

恭「お前らく席に着け」

蒼「さて、輝と怜 1年A組にもどりましょう」

輝「うん」

怜「ああ」

輝と蒼空と怜は1年A組でA組はまともな人ばかり
テストの順位は1位が怜で2位が蒼空で3位が輝だそうだ
ま、その順位は私がこわすけど・・

「いよいよ1週間後はテストだ。だから今日からがんばれよ」

「ええ」

「なんでテストなんだよ」

「赤点はとらないようにしろよ」

「く無理」

「せいぜいがんばれ」

ガラガラ

流「テストってだけでおおげさだろ」

晃「流華って勉強できるの」

「まあまあできる」

「いいなあ」

蓮「テストで赤点とつたらすごい量のプリント＋補習

があるからな」

「へえ、そうなんだ」

すごい量のプリントと補習か

私には関係のないことだけどテストか

楽しみになってきたな

成龍？！

今は屋上でさぼり中

晃「そういえばまだ流華に話してなかったことがあったけ」

「何の話？」

「実は僕たちね No・2の成龍^{せいりゅう}って族に入ってるの」

「へえ、そうなのか」

晃輝「驚かないの？」

「全然」

拓「ここ族に入ってるやつがいるのはふつうだし」

蓮「まあな」

No・2の族ってことはケン力強いんだろうな
最近、体動かしてないし・！そうだ

「俺も成龍に入れてくれないか？」

拓「流華が入るなら俺も入るけど・」

蒼「蓮と怜どうしますか？」

蓮「別にいいぜ」

怜「いいけど・」

晃輝「「やった」」

ちなみに成龍の総長が蓮で副総長が怜だそうだし
そして後の4人が幹部で私と拓海も幹部になった

テスト当日

　　時は過ぎて1週間後

晃「テスト勉強全然してない」

「そっいえば俺も全然してなかったな」

「！わーい　仲間がいた」

空「ふつう勉強するだろ」

蓮「まあな」

ガラガラ

涼「今からテストをはじめろぞ」

わかってると思うが、赤点をとったらプリント

+補習だからな」

「最悪・・・」

「ドツカ彼方の星まで消エテ」

キン〜コン　カン〜コン

「はじめ!!」

へえ〜意外と簡単だな

これなら勉強しなくても十分できるし

スラスラ　スラスラ

キン〜コン　カン〜コン

「終了!!」

終わったか やっぱ楽勝だったな

晃「流華くテストできた？」

「ああ、簡単だったぜ」

輝 晃 蒼「「え・・・」」

拓「流華は頭いいから勉強しなくてもだいだいできるぜ」

空 蓮 怜「「は・・・」」

「拓海のほうが頭いいだろ」

「まあね」

俺の予想だと学年1～3位以内だろうな

テスト発表？

ガラガラ

涼「お前らこれからテストを返すぞ」

「俺、絶対赤点じゃないと思うぜ」

「ええ〜いいなあ〜」

「これから順番に返す 赤坂〜」

「はい」

晃「！やった〜」

涼「妃〜」

「はい」

500満点中499点か

まあまあいいほうだな

「・・・以上だ これから学年1位だった奴の
発表が放送であるぞ」

キン〜コン カン〜コン

「おほん、今から学年1位だった人の点数を発表
する。1年の1位は500点中499点だった」

「は？499点とかすごすぎるだろ・・・」

「誰だよ あんな点数とつたのは」

「2年の1位は500点中456点

そして3年の1位はなんと500点中500点だ
みんなもみならうようにしなさい

「以上で終わります」

「屋上」

晃「流華、テスト何点だった？」

「499点」

「『は？』『』」

流「拓海は500点だろ？」

「そうだよ」

「『『』』は？』『』」

「流華と拓海がいなくなった後」

晃輝「流華と拓海、頭よすぎだし」

空蓮「確かにすごいな」

蒼「そうですね」

怜「500点中499点・・・」

神崎 雅（かんざき みやび）
†

晃 輝「ひまだな」

蒼「確かに暇ですね」

今は成龍のたまり場みたいなのところにいる
晃たちの言うようにひまだ

ブーブー

蓮「流華 携帯なってるぞ」

「ん、サンキュ」

「もしもし？」

？「流華 仕事だからいつものところに来て」

「わかった」

ツーツー

空「だれから？」

「空たちの知らない人」

空「ふん」

「じゃ 俺、用事できたからいくな」

拓「俺もいつていいか？」

「べつにいいけど」

晃 輝「やった」

蒼「電話の相手教えてくださいませんか？」

「神崎 雅（かんざき みやび）
雅（みやび）
っていう人」

拓「そいつって男か？」

「まあな」

拓「そうか」

「流華」こつちだよ」

「雅、悪いけど成龍の人たちも一緒だから」

「べつにいいよ」

「そうか」

《《《（なんで流華の周りはイケメンばかりなのかよ？）《《《

流華×雅Ⅱ精神科医！？

「雅 仕事ってあれか？」

「そうですよ」

『『『あれって？』『』『』』

「俺は流華と一緒に精神科医でアルバイトしてるんだ」

拓「いつからしてるんだ？」

「こつちに来てから3日後」

「なんで話さなかったんだよ」

「忘れてた」

「はあ・・・」

晃輝「精神科医ってすごいね」

『『確かに・・・』『』』

流雅「そうか？」

雅は私と同じ高校1年のはずだけど高校にはいつてない
高校を退学になったからケンカとかは強いほうみたいだ

雅「ここが精神科医」

『『『でか・・・』『』『』』

「流華に雅か 患者がまってるぞ」

「わかった」

「君たち7人はほかの患者たちと遊ぶといい」

『『『わかりました』『』『』』

空 怜「・・・」

く相談く

ガチャ

流 雅「失礼します」

「流華」

ギユウ

「陽 抱き着くな」

「いいじゃん」

今は男装ではなく普通のかっこう

陽は両親から虐待を受けていて、今はここで暮らしている
この病院はそういう子供たちを保護するための施設もある

流「陽もだいぶ元気になったね」

「流華のおかげ」

雅「で、何のために呼んだんだよ？」

「実は・・・昨日、両親が来たんだ」

雅「それで？」

「2人とも僕のことを悪く言っただんだ・・・」

流「そうだったのか。陽にこの指輪あげるよ」

「っ！流華」ありがとう」

（（単純・・・））

「流華 またきてね」

「じゃあね 陽」

ガチャ

雅「陽って単純だな」

「まあね そういうところもいいけど」

流華の正体がばれた！

晃「流華 はやかっただね」

「まあな」

蓮「もう寮に帰るか？」

『『ああ』』

蒼「そうですね」

晃 輝「「ええ」」

ガチャ

はっつかれたっそろそろ寝るか・

ブーブー

拓海からメールだ

「流華 寮の裏側に来て」

なんかの話があるのか？

「拓海どうかしたのか？」

「いまは男装しなくてもいいんじゃない？」

「まあそうだな」

ギョッ

拓海がいきなり抱きついてきた

「拓海？」

「しばらくこのままでいさせて」

「？わかった」

流華たちは自分の背後に人がいるとも知らずにしばらく抱き合っていた

？「まじかよ・・・流華って“女”だったのかよ・・・」

謎の人影Ⅱ 6人の中の1人！

晃「流華〱学校いこ〱」

「そうだな」

ガラガラ

涼「もう知ってると思うが明日から夏休みだ」

「よっしゃ〱？」

『イエーイ』

涼「ただし、前のテストで赤点とったやつはいつもどおり登校だ」

『え〱〱』

涼「俺に向かってブーイングすんなよ！！」

へ〱担任つて殺気だせるんだな

「ひっ！！ごめん」

涼「なんでごめんなわけ？」

「あっ」

『すみませんでした』

晃「屋上いこ」

「〱〱ああ〱〱」

蒼「空 流華のことみてるけどどうかしたの？」

「ちよとな〱〱」

「そうですか」

空「単刀直入に聞くけど流華つて“女”だよな？」

『〱〱〱は？〱〱』

「本当に単刀直入だな」

空「で、どうなのか？」

拓「流華〱〱」

「そう、空の言う通り私は女だよ」

8人の仲間たち シ

晃輝「女なの？」

蓮「流華 説明して」

「私は拓海の家に住候させてもらっていて

拓海の父親がこの男子校の理事長だったから」

空「たったそれだけ？」

「うん」

蒼「普段の姿を見せてくれませんか？」

怜「・・・ああ」

「わかった」

パサ カチャ

私はメガネとカツラをとった

『『『・・・』』』

晃輝「うわー」

蒼「流華 すごい美人ですね」

「そうでも・

パンツ

だれだ？私がしゃべってる途中に・

流「ってなんで雅がいるの？」

そう、雅はこの生徒でもないのになぜか今、ここに

「流華・そのかつこう・・・もしかしてばらしたの？」

「まあね」

「そうなんだ」

拓「なんで雅がここに

晃輝「「そうそう」「」

「ああ、明日からこの学校に通うから」

『『『『え・・・』』』』

「ってことだから俺も流華たちの仲間にはいっていいか？」

蓮「べつにかまわないけど・・・」

輝「ということは、僕も含めて9人か」

蒼「これからぎやかになりそうですね」

怜空「「そうだな」「」

？戦い？

今はのんびりと倉庫で遊んでいる

バン

「総長！大変です！外にNO・5とNO・4の奴らが・・・」
「わかった」

晃「うわゝすごい人数」

輝「ほんと」

蒼「蓮 戦うしかないみたいですネ」

「そうだな」

蓮「流華は危ないから見ている」

「うん」

ま、成龍がピンチな時は戦うけど

そつえば、NO・4とNO・5は卑怯な族だったけ

雅「俺は戦ってもいいよな？」

蓮「雅はいいぜ」

晃輝「じゃ流華行ってくるね」

拓「流華 絶对外、出んなよ」

空「じゃあな」

怜「・・・」

「NO・4とNO・5に負けずに勝つてね」

『『『『もちろん』』』』

こうしてNO・2 VS NO・4×NO・5の戦いがはじまった

NO・2 VS NO・4×NO・5(1)

「うわゝNO・4とNO・5相変わらず卑怯だ事」

拓海が外に出るなど言っていたけど無視して今は外

「さてNO・2は勝てるかな」

蓮「NO・4とNO・5のみなさん何しに来たんです？」

「NO・2をつぶすために決まってるだろ」

晃「なんで素手で戦わないわけ？」

「どうでもいいだろ」

空「早く終わらせようぜ」

蒼「それもそうですね」

「お前から今日こそNO・2をつぶせ！」

『『承知しました』『』』

晃 輝「「でわゝスタート」」

『おりゃー』

晃「遅いよ」

輝「ナイフとかずるゝい」

ドス

「ずるくなんかないよ」

「ぐはっこのチビが・・・」

ドスッ

勝てればいいんだから・・・」

「ふん！そこで寝ていてね」

「負けてるくせに」

空「へたくそ・・・」

蒼「それじゃ当たりませんよ」

「！なんだとー」

お手本見せますよ」

「うるさい・・・だまってる」

ビュン ガンッ

バキッ

「うつ・・・いてえ・・・」

「ぐっ・・・がはっ」

「くすっ効いたかな？」

雅「流華より弱いね」

ドス バキ

「お前・強すぎるだろ・・」

「そうでもないよ

ただ君が弱いだけ」

拓「早くかたずけるか」

「ふっそんな簡単には

バキッ

いかねーよ・・」

「簡単だったけど」

蓮「NO・4の総長さん

「NO・2の副総長さん

始めましょうか？」

こちらを始めましょう」

「ああ、そうだな」

怜「・・・」

ビュ シュ ドス

「おりゃーぐえ・・」

「意外と強かったんだ」

「たいしたことないな」

NO・2 VS NO・4 × NO・5 (2)

流「やっぱり成龍のほうが断然強いな」

ヒュ グサ

！なんでナイフが飛んできたんだ・・・？

「へへよくよくれましたね」

「だれ？」

「NO・4の幹部の龍崎^{りゅうせき} 颯^{はやて}です。あなたは？」

「NO・2の幹部で妃^{きひき} 流華^{るか}」

「幹部なら戦いがいいがありそうですね」

ヒュ ヒュン

「ここまでよけられた人はあなたが初めてですよ」

「そうですか」

にしてもすごいスピード・・・

NO・2に楽々入れそうなんだけど・・・あ！そうだ

「NO・4やめてNO・2に入らない？」

「戦いの途中によくのんきなと言えますね」

「NO・4よりも絶対NO・2のほうが強いし君にもあつてと思うんだけど」

「まあそれもそうだなでも俺NO・4だから入れるわけないんじゃない？
ね？」

「そのところは大丈夫だと思うよ」

「ならNO・4はやめますよ」

「それはよかった」

はあゝこれで何とか助かった

もうそろそろで戦いも終わりそうだな

颯にはスピードがあるから成龍にも入れるだろうな

龍崎 颯（りゅうざき はやて）？

晃「NO・4 意外と強かった・・・」

輝「そうだね」

蒼「なんで強かったんですかね？」

「ああそれは俺が鍛えたからな」

『『『『誰？』『』『』』』』

「NO・4の幹部だった龍崎 颯」

空「なんでNO・4の幹部がいるわけ？」

流「私が連れて来たの」

怜「どうしてNO・4の奴を連れて来たんだよ・・・」

「龍崎ならNO・2のほうが似合ってると思うから」

『『『『はあ・・・』『』『』』』』

「蓮！龍崎を入れてやってくれない？」

颯「俺何でもやるから入れさせてください」

「まあそんなに言うなら入れてあげないこともないが」

「！ありがとうございます」

怜「ただし、ここでは武器は使えないからな・・・」

「はい！」

晃「颯って人のことどう思う？」

輝「NO・4ってというのが・・・」

拓「流華何考えてるんだろうな？」

蒼「流華なりの考えってなんでしょうかね」

空 雅「「そうだな」」

流華たちの後ろでは颯のことについて6人がひそひそと

話し合っていた

“ 海 ”

ミンミンジジ

晃 輝「セミうるさ〜い！」

空「暑い・・・」

確かにセミうるさいし・・・暑いし
ちなみに今は寮の中

晃「あつ！みんな海行かない？」

輝「！それいいね」

蒼「蓮 どうしますか？」

「気分転換にいいかもな」

怜「そうだな・・・」

晃 輝「やった〜」

あいかわらず晃と輝はかわいいこと

拓「流華は行くんだろ？」

「まあね でも海には入らないよ」

「・・・なんで？」

雅「いいじゃないですかそれに水着は着ると思いますよ ねっ」

なんで海に入らないのに水着着なきゃいけないんだよ・・・

それに雅、目で何か訴えてるみたいだし

流「うん・・・」

晃 輝「やった〜」

流「海か・・・」

雅「流華の水着姿楽しみだな〜」

「そう」

「くすっ 大丈夫俺が流華を絶対守るから」

「ありがとう、雅は優しいね」
「まあね・・・」

流華に何も起きなければいいんだけどなあ
流華にとつて”海”は過去を思い出すものだからな
それにこのことについては拓海も知らないことだから
俺が絶対守ってやらないとな

海に到着??

蓮「海についたぞ」

晃「わあゝい」

蒼「一度着替えてから砂浜で合流しましょうか」

「そうだね　じゃあ、行ってくる」

蓮「気を付けてな」

「うん」

はあゝ水着に着替えたけど肌の露出部分多すぎ・

恥ずかしいからパーカー着ていこ

がやがや

なんだ?やけに騒がしいな

「キヤーかつこいいー」

「8人のイケメンなんてぜーたく」

キヤツキヤ

流「そういえば全員インイケメンだったけ」

雅「ふつーそういうこと忘れませんけど・」

「なんで雅がここにいるわけ?」

「女子がうるさいから抜け出してきた」

うわゝすごい殺気が出ている・

晃「!流華来たよ」

蒼「そうみたいですね」

晃「蓮たちゝ女子につかまってないで行くよ」

晃「・・・すごい強引だな」

輝！！

晃「流華いつてくるね」

「いつてらっしゃい」

「じゃあね」

流「なんで雅と怜は行かないの？」

雅「流華を一人にすると心配だから」

怜「別に海なんて好きじゃないし」

怜・・・海が嫌いとか本当かな？

海が嫌いなら私と同じだけど

雅「蓮たち楽しそうですね」

「んそうだね」

怜「輝・・・？」

「輝がどうしたの？」

「あれっっておぼれてないか？」

！怜の言う通り輝はおぼれてるみたいだ

流「輝！！」

ダッ パサ バシヤ

パーカーをとって私は海の中に入った

雅「流華！！今すぐ戻って！！」

雅・・・ごめんね・・・

あの時そうしてればあんなことにならずにすんだのに・・・

そして前の時みたいに苦しまずに済んだのに・・・

でも私は後悔してないよ。だって輝は仲間だから

発作・・・

流「この下か・・・」

スーバシャ

輝は・・・何とか大丈夫みたいだ

グッ バシャ

流「輝！大丈夫？」

「ゲホゲホ・・・流華ありがとう／＼／」

「輝顔赤いけど・・・」

「こっこれはなんでもないよ」

「ならいいけど」

流華の胸があつてゐるなんて言えるわけないじゃん・・・

『『『輝！』『』『』』

「ごめんね・・・足がつつておぼれちゃた・・・」

蓮「そうか・・・流華ありがとうな」

「別に・・・」

雅「流華！もどっこいって言ったのに」

「雅・・・うつぐつはあはあ」

雅「ちつやつぱり発作が起きたか」

拓「発作ってどういうことだよ！！」

うつ頭が痛いし胸が苦しい・・・

いやだ！いかないで私を見捨てないで・・・”誠”

蓮「救急車呼んだから」

雅「そうか」

晃「流華に何があつたの？」

「病院についたら話しますよ」

怜「救急車が来たぞ」

雅「俺が救急車に乗るから蓮たちは車で行って」
蓮「わかった」

ピーポーピーポー

流華、お願いだから目を覚まして”流華！”

？流華の過去？

晃「雅！」

輝「流華は？」

雅「流華は今眠っているだけで大丈夫だって」

『『『『よかった・・』』』』

「流華のことについて今から話すよ」

拓「ああ、頼む」

中3の夏、流華には誠せいつていう彼氏がいたんだ

晃「彼氏ってどんな人？」

「さあ？俺もそのことは知らない」

そして流華はその彼氏と楽しい日々を送っていた
だけである日事件は起きた

その日は海に来ていたんだって

で、誠まことつていう人の前に一人の男が来たんだ

輝「男の人って誰？」

「山城さんじょう 朱理しゅり」

その山城朱理しゅりってやつがいきなり出てきてこう言ったんだ
”きみ・・死んでくれる？”って

怜「それって逆恨み？」

「いや、ただ単に目障りだけだったみたい・・」

『『『『え・・』』』』

蓮「目障りってそりゃあないだろ」

「俺も思うよ」

そして、朱理はそういった後いきなり誠の顔を海に沈めたんだ・

蒼「流華は強いんですね」

「強くないよ、逃げてるだけだから」

空「確かにそうかもしれないけど流華は強いと思うぜ／＼」

空・顔赤くなるほど恥ずかしかったんだ・

蓮「流華には俺たちがいるからな」

怜「いつでも相談乗るから・」

おお、あの怜が10文字もしゃべるなんてにしてもさすが総長と副総長だねえ

拓「無茶な行動はすんなよ」

「わかってるって」

拓「信用できないね」

雅「その時は俺が助けるし」

晃「ヒュー雅かつこいいこと言うね」

「まあね」

流「みんなありがと」

晃「どういたしまして」

蓮「流華帰ろうぜ」

「うん」

晃、輝、空、蒼空、蓮、怜、拓海、雅・

みんな優しいね

蓮たちの仲間でほんとよかったな

遊園地へGO？

晃「今日も相変わらずひまー」

輝「右に同じ」

蒼「くす、そんなに暇だったら宿題でもしたら？」

晃輝「いやに決まってるじゃん」

拓「宿題が嫌なら遊園地いかね？」

晃「いく〜」

輝「うんうん」

「拓海なんで遊園地のわけ？」

「流華話聞いてたのか」

「うん、っていうか全員聞いてたし」

「そうなのか？」

『『ああ』』

『『そうだよ』』

「で話に戻るけど、なぜ遊園地なのかはちょうどチケットが9人分あるから」

もつたいないと思つて」

空「ふ〜ん」

蓮「遊園地行くか？」

怜「チケットもつたいないしな」

空「怜が行くなら行くけど…」

蒼「自分も行きますよ」

流「みんな行くんなら行くよ」

雅「流華が行くなら俺も行くよ」

晃輝「もちろん僕も行くよ〜」

蓮「これで全員一致か」

拓「俺だけ忘れてるみたいだけど、チケットが無駄にならずに済んだな」

？到着？

蓮「遊園地ってここか」

晃「なんていうかすごい人ごみ」

拓「夏休みだしな」

蒼「すごい人ごみなのはここだけですよ」

空「確かにな」

怜「・・・」

輝「うえ、女ばかり・・・」

流「イケメンは大変ですね」

雅「そこまで大変じゃないけどな」

「さすが雅、まいてくるのがうまいね」

「あんなの楽勝」

にしても蓮たちの場所だけ女の人たちがいっぱいだなあ
あの人たちと一緒に入ったらこうなっただろうな

晃「ふっやつと出られた」

輝「気持ち悪い・・・」

蒼「にしてもこんなことが続くのはちよと嫌ですね」

蓮「じゃ、2つに分かれて別行動するか」

晃「どうやってわかる？」

拓「あみだくじでいいだろ」

あみだくじねえ。紙持ってるのか？

！地面に書くのか

拓「あみだの結果がでたぞ」

晃「僕は蓮、雅、拓海、蒼空の5人で」

輝「僕が怜、空、流華の4人ってことだね」

蓮「別行動といくか」

空「ああ」

輝、怜、空と一緒にか・・・なんかくじ運ないなあ・・・

あの3人って意外としゃべらないし

まあ、なんとかなるか

＋お化け屋敷＋

輝「はじめどこ行く？」

空「メルヘンなもの以外」

流「あ、お化け屋敷だつて」

空「目の前にあるんだし、お化け屋敷にしようぜ」

怜「そうだな」

輝「え、お化け屋敷？」

流「輝行くよ」

「うん・・わかった」

輝の顔色が悪いような気がするけど
もしかして怖いものダメだったり？

まあ、それだったら面白いけどね（笑）

「次の方どうぞお入りくださーい？」

うわー甘つたるいような言葉だなあ

流「輝、突っ立ってないで行くよ」

「え、うん・・」

空「ふーん意外とよくできてるねえ」

怜「この生首とかな」

流「確かにリアルだねえ」

「許さない・・絶対殺してやる・・」

輝「ぎゃーなんか来たー」

怜「本当にリアルだな」

輝「ぎゃーこないでー」

流「え、なんで私も一緒に走らないといけないわけ？」

はあはあ

「怖かった・・・」

「くすくす、輝やっぱり苦手だったんだ」

「わかってたなら助けてよ」

「それじゃあ面白くないじゃん」

「流華、Sだね・・・」

「それより、輝足大丈夫？」

「！よくわかったネ・・・」

「はあ・・・じゃあ背中に乗って」

「え・・・いいの？」

「うん、それと怖いなら顔伏せたらいいし」

「流華・・・やさしいね／＼」

そんなに優しくはないと思うけどね

「輝・・・そろそろ出口みたいだよ」

「え、ほんと？」

「ほんとだよ」

「よかった・・・」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8841q/>

仲間たち

2011年3月16日16時57分発行